

森・川・海MANABIネットワークシステム構築の話し合いの場における「自己の語り」が他者の「自律性」に与える影響

佐々木 剛 (東京海洋大学)

横川 洋明 (東京海洋大学)

【要 約】

住民が主体となり地域資源を活用した持続可能な地域振興を目指す上で、地域住民の関係性を高め主体的に取り組む内発的なまちづくりが求められている。

本研究では、森・川・海MANABIネットワークシステムの構築を目指した話し合いの場において、自己の語り、グループ内で話し合いの進展にどのように影響を与えるのかを明らかにした。分析の結果、参加者は『個の自律性』を当事者間で認め合うことで、『共有化された自律性』へと「焦点化」され、話し合いが進展することが確かめられた。

【キーワード】

水圏環境教育 自己決定理論 関係性 有能感 自律性

I 研究の背景

東日本大震災の復興事業として巨大な防潮堤の建造が計画されている。当初の計画では、宮城県で248.1km、福島県で74.6km、岩手県で66.6kmの防潮堤が作られる計画であり、すでに一部は着工されている¹⁾。防潮堤の維持管理費はその地域で負担することが求められており、将来の世代へ負担を残す復興事業ははたして持続可能な政策なのか疑問視されている²⁾。また、過疎・高齢化の問題も深刻化し、津波被災地のみならず、神奈川、千葉などの9都府県を除き、38道府県において減少し、総人口の23%が65歳以上であり、高齢化率では世界で最も高い水準となっている³⁾。

こうした社会問題に対し、地域資源を活かした地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る「地域おこし協力隊」⁴⁾の取組をはじめ、政府としての対策も講じられているが、第一に求められるのは人々との結びつきや地域への愛着を育み、内発的に発展する地域コミュニティの創造であり、地域における人と人との関わりである「関係性」の創造である。

大江(2013)は「地元の人々が地域の力を活かし、内発的に復興を進める「内発的復興」の取組が必要であり、共通要素として「人と人、人と自然のつながりを何よりも大切にすること」であると示す⁵⁾。

Deci・Ryan(1985)は、「人間は積極的に環境に関わろうとし、発達しようとする傾向を持つものであり、内発的動機づけによって発展の可能性が高まる」とする自己決定理論を提唱した⁶⁾。内発的な動機づけとは、課題や活動それ自体が誘因であるという動機づけを指す。内発的な動機づけを高めるためには次のような3つの心理的条件が必要である。第1が『関係性』であり、「周囲に大事にされている感情」、「共有すること」、「ある社会に対する帰属意識」を指す。第2が『有能感』であり「自己効力感」、「自信」を指す。第3が『自律性』であり、「普遍的価値、自らの興味関心のもとに行動すること」である。この自己決定理論に基づいた教育を実施することによって、一人一人の『関係性』、『有能感』、『自律性』を高めることで内発的に動機づけられ、一人の社会的人間として能力を発揮できるようになり、自らの生得的、後

天的に獲得した能力を最大限に活用できるようになる⁷⁾。

また、金子・佐々木(2015)は、中学校1年生を対象とした「運河学習」において、野外での探究活動が「運河が自分たちの生活の一部である」との意識を芽生えさせ、『関係性』、『有能感』、『自律性』を段階的に高めていることを明らかにした⁸⁾。

地域コミュニティの創造に関する先行研究では、参加者との出会いの積み重ね⁹⁾、合意形成の場面での「交流の場」の存在¹⁰⁾、地域住民のお互いの信頼関係¹¹⁾等の当事者間の関係性が意欲を向上させ地域リーダーの育成、活発な意見交換、一体となった地域作りにつながる事が報告されている。

一方、当事者間と行政や研究機関等の支援者との関係性についても地域との距離感や適切なテコ入れをする行政側の支援が内発的発展に必要な不可欠であり¹²⁾、地域住民ではなく外来者による地域振興のマネジメントが行われていることで地域文化の伝承を踏まえつつ新たな地域資源活用が行われ¹³⁾、更に地域共同管理空間(ローカル・コモンズ)の維持及び再生において、研究者自身が当事者として現場に入り込み、行政関係者と地域の人びととともに問題解決に当たることが必要であるとしている¹⁴⁾。また、専門家の真剣さに報いようと地域住民の熱意が呼応し発展した事例もある¹⁵⁾。

しかしながら、当事者間あるいは当事者と支援者との関係性の重要性が指摘されているものの、参加者の内面に着目し関係性がどのように構築され、内発的な発展に結びついていくのかについて十分に明らかになっていない。

本研究では、話し合いの場において、自己決定理論の『関係性』、『有能感』、『自律性』に着目し、自己の語り、話し合いの進展にどのように影響を与えるのかについて明らかにした。

2 方法

東日本大震災を受け、震災後の内発的復興を目指し、2015年に森・川・海MANABIネットワークシステム(以下MNSとする)が結成され、MNSの発足時において「森・川・海の活動を取り上げ、その活動をどうつなげ価値を生み出してい

くか」での話し合いが行われた。本研究ではこの時の会話プロトコルを分析対象とした。

- (1) プログラムタイトル:「対等に対話して学び合う～10年後の宮古を語りませんか?～」
- (2) 日時:平成27年3月7日(土)13時-17時
- (3) 内容:第1部 講演会,第2部 ワークショップ
- (4) 場所:岩手県立水産科学館

ワークショップの参加者は45名であった。5名～6名を1グループとし、参加者各自が自由にアイデアを出し合い、互いの発想の大切にし、連想を行うことによってさらに多数のアイデアを生み出すブレインストーミング¹⁶⁾の手法を援用し、以下の2点を心がけるよう説明した。

- 1) 参加者の対等性、対話から創造性が生まれること(一方的に話すことはNG,聞くだけでもNG,相手の立場を尊重し学び合う)。
- 2) 役職等にとらわれず自由な立場で語り合うこと¹⁷⁾。

本研究での分析対象は、ランダムに選択した2グループの会話のデータとした。

自己決定理論をもとに『関係性』、『有能感』、『自律性』に着目し、個々の自己の語り、話し合いの進展にどのように影響を与えるのかを明らかにするため、話し合いの場における対話についてSCATを用いて分析した。

大谷(2008)によるとSCATは、言語データをセグメント化し、それぞれに、<1>データの中の着目すべき語句、<2>それを言いかえるためのデータ外の語句、<3>それを説明するための語句、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案していく4ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する手続きとからなる分析手法である¹⁸⁾。またSCATは比較的小さな質的データの分析にも有効であるため、今回の分析方法として適切であると判断した。

3 結果

(1) 自己紹介での語り

ワークショップの開始時に、森・川・海の活動に関連して過去にどのような体験や経験を有しているか、今現在何を行っているのかをテーマに自

己紹介を実施した。「自己紹介の語り」を SCAT 分析し、テーマ・構成概念を明らかにし『関係性』、『有能感』、『自律性』に当てはめた結果を表1、表2に示した。

表1 Aグループの自己紹介のSCAT分析結果

話者	(4) テーマ・構成概念
a1	S県出身で、専門的知識を持ち<有能感>、I県M市を流れるN川を拠点に<関係性>環境保全活動に長年にわたり取り組んでおり、河川環境保全に取り組んでいる。<自律性>
a2	T都に30年住んだ後地元に戻った。M市に帰属意識<関係性>を持ち、環境保全・教育活動に取り組んでいる。<自律性>
a3	海洋生物研究を専門家としてプライド<有能感>を持ち、中央政府主導の防潮堤建設に疑問を抱き、今回のワークショップに参加した。<自律性>
a4	M市で生まれ育ち、専門的知識を有しており<有能感>、M市とH川への帰属意識を持ち<関係性>、在来知が豊富であり、郷土の自然を大事にしようとしている<自律性>。
a5	S県出身<関係性>で、サービス業に従事し観光客の視線に合わせた提言をしたい。<自律性>

表2 Bグループの自己紹介のSCAT分析結果

話者	(4) テーマ・構成概念
b1	I県に帰属意識があり<関係性>、観光業に従事しており、更に深く学びたい。<自律性>
b2	T県出身<関係性>でH川流域の持続可能性について研究し、H川流域の持続可能性の研究をしたい。<自律性>
b3	地域団体に在籍し、M市K地区に帰属意識があり<関係性>、人口減少の問題から守りたい。<自律性>
b4	M市K地区に帰属意識があり<関係性>、着地型観光を実現しようしたい。<自律性>
b5	M市で生まれ育ち、M観光協会に30年間勤務し、観光に対する思いとふるさとM市への帰属意識がある<関係性>。着地型観光を発展させたい。<自律性>

分析の結果、出身地、職業、現在の活動内容、プログラムへの参加動機等が語られ、それらの語りの中に『関係性』(帰属意識やふるさとを大事にしたいという感情)と『有能感』(自身の専門性に対する「自信」)、『自律性』(普遍的価値、自らの興味関心のもとに行動する)に関わる内容が語られていた。

(2) 「話し合い」時の会話中における『関係性』、『有能感』、『自律性』

「自己紹介」の後に実施した「話し合い」時における発話についてSCATを用いて分析し、<4>テーマ・構成概念を明らかにし『関係性』、『有能感』、『自律性』に当てはめた結果を表3、4に示した。

表3 Aグループディスカッション中のSCAT分析結果

話者	(4) テーマ・構成概念
a1-1	閉伊川を中心に観光資源や問題点を話していきましょう。a4さんへ意見を促す。<共有→関係性>
a1-2	文化や食のイベントを全国の人に知ってもらう情報発信が必要だ。<自律性>
a3-1	行政主導の復興事業に不満がある。<自律性>
a3-2	生き物が住めるような開発が必要。<自律性>
a3-3	宮古の自然を大切にしていることが観光資源になる。<自律性>
a4	砂浜がなくなり天然アユが減少した。<自律性1>
a5-1	良いものを全国に知ってもらいたい。<自律性>
a5-2	特定の期間だけではなく、いつ来ても楽しめることが必要だ。<自律性>
a5-3	自然を大切にする住人は観光資源にならない。<自律性>

表3はAグループのディスカッションにおける参加者の発話を示したものである。a1-1は「何か売りになるようなところ、ここはおもしろいって言うようなことがa4さんよくご存じのところで。」といった意見を促す発言をしている。また、a1-2「有名な文化的なイベント、情報発信が必要だ」との意見を述べていた。

a2は発話が少なくほとんどが相槌であり、a4の

専門的な話題に対して発話がしにくい状況であった。a3-1は「われわれ一般の人間には全然、話は来ないんで。」のような行政主導の事業への不満やa3-2「川をうまく造っていこう。でも、生き物が住めるような。」、a3-3「その宮古の人間がその自然を大切にしてるよ、ということが、一つの観光資源というか。」等の生物や自然環境についての意見が出された。a4は「砂浜を埋めてしまっ、もう天然のアユがいなくなって。」と環境政策や公共事業に対する問題点を指摘していた。a5-1は「僕はいい物を全国の人に知ってもらいたい。」、a5-2「閉伊川の川沿いもきれいなところあるんですけど。」という発話から、宮古の自然についての意見と全国の観光客に向けての情報発信の必要性を提案していた。しかし、「個の自律性」から発せられたそれぞれの意見がグループ内ではかみ合わない状況が続いていた。

表4 Bグループディスカッション中のSCAT分析結果

話者	(4) テーマ・構成概念
b1-1	場所と場所を結びつけるきっかけがあると良い。＜共有→関係性＞
b1-2	ヒッチハイクに観光案内の要素も入れてみよう。＜共有→関係性＞
b1-3	漁船を移動手段の一つにできるとよい。＜共有→関係性＞
b1-4	漁師体験や調理、宿泊を繋げて全て行えるようにしてみよう。＜共有→関係性＞
b2-1	宮古の自然に付加価値を付けて観光資源になるようなアイデアを出していきましよう。＜共有→関係性＞
b2-2	一般の地域住人も参加するようになれば観光を通して地域の住人も変化していく。＜共有→関係性＞
b3-1	17のジオポイントが観光資源になるのでは。実際に体験することで魅力が伝えられる。＜帰属意識→関係性＞
b3-2	船でヒッチハイクが面白いよねという意見の共有。＜共有→関係性＞
b4-1	源流から海まで体験できる閉伊川は宮古市の大きな魅力である。＜帰属意識→関係性＞
b4-2	スキーのように登山道具がレンタルできると良いのでは。＜共有→関係性＞

- b5-1 実際に行くことの大切さと、行ったことによって知った閉伊川の街道の紅葉の美しさ。＜帰属意識→関係性＞
- b5-2 閉伊川の景観には素晴らしいところがある。＜帰属意識→関係性＞
- b5-3 宮古の豊富な海産物を観光客が利用できるとおもしろいことができそうだ。＜共有→関係性＞

表4はBグループのディスカッションにおける参加者の発話を示した。

b1-1は「なんかこうシナリオっぽいのがあればだから。そういうのが、まあ、こういうのと一緒にね。」やb1-2「ヒッチハイクに観光案内の要素も入れる」、b1-3「漁船を移動手段のひとつにする」、b1-4「漁師体験や調理、宿泊を繋げて全て行えるようにしてみよう。」など繋がりが必要性を訴えていた。また、同時に「それはでもおもしろいと思いますね。」や「そういうのがいいんじゃないですかね。」というような他者の意見に賛同を示していた。また、他の他者の意見を認めつつ、発展的に自身の意見を示していた。

b2-1は「まず豊かな自然ってなにかを考えていただいて、それに更にアピールできるような最大限の付加価値をつけるにはどうしたらいいか」というようにディスカッションの内容についての共通認識を作ろうと働きかけていた。「そうするとそうですよね。」や「そうですね。そこからまた地元のかたも変わってくるんじゃないかと。」のように他の参加者の意見を共有し理解を示していた。

b3-1は「なのでやはりその魅力ある17のポイントを中心に商品を企画していくのも必要なんじゃないかなというふうには思います。」という発話から、地域資源を活かそうとする意思が示されていた。また、「船でヒッチハイクできたらおもしろいと思いませんか。」のように他者に意見を促す発話が見られた。

b4-1は「一つの市で源流から出る場所まであるんだってというのは、すごく魅力あるポイントじゃないかなと思います。」という発話から、閉伊川そのものが観光資源となるのだとの意見を述べていた。b4-2「宿泊で、(登山道具を)手ぶらでも来ても貸しますよっていう、レンタルスキーがあるんだから、あってもいいですよ。」、「それが

でも、できたらすごいですよね。これ、おもしろい。」のような他者への意見を求める発話や他者の意見を共有しようとする意識が表現されていた。

b5-1は「閉伊川の街道、あれは四季、特に秋なんかは紅葉で最高に綺麗です。」、b5-2「もうたくさん、自然景観がいいところなんですよね。」、b5-3「海産物を観光客が利用できる」とよい」等の地元の自然環境や海産物について帰属意識に関わる内容を提示し関係性の構築を図ろうとしていた。

Bグループのディスカッションでは、表2の自己紹介で話された『自律性』に関わる意見が出されていただけでなく、他者の意見を認めて共有し、意見を促す発話がある等お互いの意見がグループ内で共有され、意見を繋げる発話や他者の意見を自身の発展的な考え方として取り入れ発言していた。

4 考察

(1) 自己紹介での語り

本グループディスカッションでの「自己紹介の語り」では、現在の取り組みや期待したい内容が述べられていた。これは、今現在の普遍的な価値、興味関心に基づいて行動する本人の『自律性』(個の自律性とする)を表しているものである。また、『個の自律性』は個人の出身地での思い出や経験すなわち本人の『関係性』、『有能感』に関連していた。

Bグループでは、個人の出身地での思い出や経験すなわち本人の『関係性』、『有能感』から『個の自律性』が語られていた。さらに、全員が他者の意見に耳を傾けながら自己紹介の語りを展開していた。これはお互いが尊重し合いながら対等な対話によって参加者同士の新たな『関係性』が構築されている様子を示すものである。

一方、Aグループでは、専門的な知識が求められる発話が多く見られた。この発話に対し疎外感を感じる参加者が見られ、同時に発話者は意見が認められなかったと感じ消極的になり、『関係性』・『有能感』が高まりにくい状況であった。

和木ら(2015)は相互の意見を吟味しあう姿勢、互いの意見に共感しあう姿勢、対象に注目し新たな成果を作り出す姿勢、課題を解決するためのファシリテーターの適切な助言が見られることで

グループ内に協働的に課題を解決しようとする態度が創造されるとしている¹⁹⁾。今回の職業や年齢が異なり多様な過去の『関係性』、『有能感』、『個の自律性』を持った参加者によるグループディスカッションにおいても、グループ内での意見の共有が図れるよう促すファシリテーションが必要であることを示していると言えよう。

(2) 対等な対話から生じる焦点化

また、Bグループでは「これはでもあれですね、ジオサイト。」等互いの意見を吟味し合う姿勢、「できたらすごいですよね。これ、おもしろい。」、「船でヒッチハイクできたらおもしろいと思いませんか」等新たな意見を提案し共有しようとする姿勢、「それはでもおもしろいと思いますね。」等課題を解決するために発展的に意見が広がっていく様子が確認された。

和木ら(2015)²⁰⁾は探究時の問題解決的な活動はラーニングサイクル²¹⁾の繰り返しではなく、スパイラル状に発展するという。すなわち、Bグループにおいて、「ジオポイントの提案」→「早池峰山を利用してはどうか」→「登山道具をレンタルできたら良い」というように、対話の内容が漠然としたものから具体的なものへと「焦点化」されていた。

(3) 「個の自律性」の尊重から「共有化された自律性」へ

外発的に動機づけられていた場合でも、自分自身が納得した内在化された価値として、自己の価値観と統合して行動するとき、自己決定的な行動となる²²⁾。他の参加者の「個の自律性」に関連した意見に対し、承認し、共有することで自律性に基づいた意見として取り入れている。これは、対等な対話によって生じた「焦点化」と同義である。このように焦点化され、新たに得た『自律性』を『共有化された自律性』と定義する。『共有化された自律性』は、グループの話し合いにおいて「焦点化」によって各個人の『自律性』が複合したもので、グループ内の自律性であると言える。この『共有化された自律性』がグループ内でつくられることで、話し合いが創造的に発展していると考えられることができる。

一方、Aグループにおいては、互いの意見に共感しあう姿勢が見られず『個の自律性』から生じ

る意見の主張で終わりBグループのような「焦点化」が起きず、『共有化された自律性』へと進まなかった。また、他の参加者への意見を投げかける発話も少なかった。個人が友人に対して働きかけることで相互作用が生じ、親密な友人関係が形成、維持される過程が想定され²³⁾、他者への働きかけが『関係性』を高めるきっかけになると考えられるが、他の参加者への意見の投げかけが少ない場合、『関係性』が高まりにくくなるであろう。

桑子（1999）は「その空間に生きた人々がその空間をどのようなものとして理解してきたか」を「空間の履歴」と定義している²⁴⁾。「空間の履歴」は、帰属意識に関わることから『関係性』に該当する。谷口・桑子（2015）は、空間の履歴を掘り起しながら共有し「意見の理由と理由の来歴の把握」を繰り返す確認することで関係者間の信頼関係を深め、創造的な解決策による合意を形成するとしている²⁵⁾。これは、『関係性』を互いに共有し合うことによって、『有能感』が高まり普遍的な価値のもとに行動する『共有化された自律性』が高まっているものと捉えることができる。

5 まとめ

本論文では、森・川・海MANABIネットワークシステム構築のための話し合いの場において自己決定理論とSCATにより、ワークショップでの自己紹介と話し合いの発話について、共有化された自律性」の焦点化のプロセスを明らかにした。その結果、ワークショップでの『個の自律性』から発せられた意見は自己紹介で話した過去の経験や想いによる『過去の関係性』『個の自律性』に関連した意見であり、その意見を参加者間の対話の中で理解して認め合い共有することで、『関係性』が高まり、新たに『共有化された自律性』へと意見が「焦点化」していくことが明らかになった。

謝辞

本研究の遂行にあたってお世話になった閉伊川漁業協同組合、森かわい海ネット、さんりくESD閉伊川大学校、森・川・海MANABIネットワークシステム、東京海洋大学の関係者、そして査読者の皆様に厚く感謝申し上げます。なお、本研究は、ニッセイ財団（ヤマ・カワ・ウミに生きる知恵と

工夫－岩手県閉伊川流域における在来知を活用した環境教育の実践－）、総合地球環境学研究所研究プロジェクト（地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性－歴史生態学からのアプローチ）、JSPS科研費15K11951の助成を受けて実施した。ここに深甚の謝意を表する。

引用文献

- 1) 大沼あゆみ：「人口減少下での持続可能な海岸管理政策について－防災と自然保護をめぐって－」、環境経済・政策研究、8(2)、11-17、2015。
- 2) 前掲論文1)
- 3) 平成22年国勢調査人口等基本集計結果
- 4) 総務省 地域おこし協力隊
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html
(参照2015-01-06)
- 5) 大江正章：「3.11の被災地から見える地域の力、地域のカシノジウム3.11東日本大震災と内発的復興－農山村と都市の結びつきを考える」
<http://www.csonj.org/images/bb366fb3eed32d4bea409efc57938c6d.pdf> (参照2015-12-20)
- 6) Deci, Edward L. and Richard M. Ryan. Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. Springer Science & Business Media, 1985.
- 7) 前掲論文6)
- 8) 金子実那美・佐々木剛：「中学校『総合的な学習の時間』における自己決定理論に基づいた水質改善意識の分析、臨床教科教育学会誌、2015、15(2)、17-24。
- 9) 斎藤雅洋：「岩手県紫波町における『循環と協働のまちづくり』と住民の自己形成」、東北大学大学院教育学研究科研究年報、61(2)、39-60、2013。
- 10) 久隆浩：「地区における住民主体のまちづくりプロセスのあり方に関する研究」、土木計画学研究・論文集、22(1)、189-194、2005。
- 11) 小寺倫明：「過疎地域の自律的展開：兵庫県宍粟市千種町と『やねだん』の取組からの一考察」、商大論集 63(1/2)、143-162、2011。
- 12) 山下良平・星野敏・九鬼康彰：「条件不利地域における内発的発展の要因と推進体制に関する研究－京都府舞鶴市杉山集落を事例として－」、農村計画学会誌、28、375-380、2009。
- 13) 坂本達俊・弘重譲・中島正祐・千賀裕太郎：「地域資

源を活用した農山村地域づくりにおける外来者と地域住民の協同に関する研究－新潟県上越市NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部を事例として－, 農村計画学会誌, 27, 299-304, 2008.

- 14) 桑子敏雄：「地域共同管理空間（ローカル・コモンズ）の維持管理と再生のための社会的合意形成について（特集 誰が環境問題について考えるのか）」, 社会と倫理, 24, 49-62, 2010.
- 15) 澤崎貴則・藤井聡・羽鳥剛士・長谷川大貴：「『川越まちづくり』の物語描写研究－町並み保存に向けたまちづくり実践とその解釈－」, 土木学会論文集F5（土木技術者実践）, 68(1), 1-15, 2012.
- 16) 松井啓之：「システムの解析と設計 発想法」, 計測と制御, 46(4), 292-297, 2007.
- 17) 閉伊川ワカサギ博士の何でも相談室
<http://blog.goo.ne.jp/hypom/e/59366ee1a6828570d9292537056dd5c6>（参照2016-01-10）
- 18) 大谷尚：「4ステップコーティングによる質的データ分析手法SCATの提案－着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き－」, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）, 54(2), 27-44, 2008.
- 19) 和木美鈴・佐々木剛・大島弥生：「『ラーニングサイクル』の＜探究＞段階における対話内容の分析－中学校の『総合的な学習の時間』での協働的な野外活動から－」, 臨床教科教育学会誌, 15(3), 89-98, 2015.
- 20) 前掲論文19)
- 21) 佐々木剛：「水圏環境教育の理論と実践」, 成山堂書店, 232pp, 2011.
- 22) 大芦治・上淵寿・大塚まゆみ・伊藤忠弘・長沼君主・鎌原雅彦・鹿毛雅治：「11動機づけと関係性（自主シンポジウム）」教育心理学会総会発表論文集, 45, 40-41, 2003.
- 23) 岡田涼：「親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築」教育心理学研究, 56(4), 575-588, 2008.
- 24) 桑子敏雄：「環境の哲学」, 講談社, 東京, 310pp, 1999.
- 25) 谷口恭子・桑子敏雄：「森林管理計画策定における参加と合意のプロセス・デザイン－『やんばる国頭村森林地域ゾーニング計画』策定の試み－」, 環境教育, 25(1), 96-107, 2015.